

## 第36回全国中学生人権作文コンテスト中央大会における入賞作品概要（11作品）

### 1 内閣総理大臣賞 日本のいじめ対策は間違っている

北海道・旭川市立永山中学校 2年 <sup>かみや</sup>紙谷 <sup>ももか</sup>桃歌

作者のドイツでの体験を踏まえた考察。日本の「いじめ」の問題点は、長期化・陰湿化しやすい点にある。これは、嫌がらせや集団無視など表面上気付かれにくいやり方で行われるため、また周囲の人達が止めに入らないため、いじめのストッパーとなるものがないからではないか。正しい善悪の判断をし、自分の意見を持ち、他人の意見を尊重することが大切である。特に「協調性」を重んじる日本の場合、自分の意見を持ち、主張できる機会を増やし、基本的人権に関する自分なりの意見を持たせるようにすることが必要ではないか。

### 2 法務大臣賞 CHILD LABOUR

福岡県・久留米市立田主丸中学校 3年 <sup>くりき</sup>栗木 <sup>のあ</sup>乃愛

かわいい男の子の涙のイラストと「STOP CHILD LABOUR」の文字が描かれたクリアファイルに興味を持った作者は、タブレット端末を用いて世界の児童労働について調べ始める。多くの子ども達が過酷な労働に従事する現実、作者が手にしているタブレット端末もそうした労働で掘り出されたレアメタルが用いられているかもしれないことを知る。資源を巡る争いの結果、子どもたちが犠牲となる現状が、悲しく、悔しい。

### 3 文部科学大臣賞 輝く未来を生きるために

宮城県・栗原市立若柳中学校 3年 <sup>ほし</sup>星 <sup>はるな</sup>日菜

障害のある弟に向けられる視線を気にする作者に対して、母は、障害を卑屈に捉える生き方ではなく、弟の良さをきちんと受け止める必要性を説き、弟を子どもたちの輪の中に積極的に連れて行く。そうした触れ合いを通じて、弟の周りには笑顔と人の輪が生まれている。誰もが本当に安心して暮らせる社会のため、障害のある人に寄り添う日々を、本当の豊かさとして、大切にしていきたい。

### 4 法務副大臣賞 ハンセン病を知って学んだこと

栃木県・宇都宮市立一条中学校 2年 <sup>ひがし</sup>東 <sup>たいが</sup>大我

吃音の障害がある作者は、偶然、テレビで多磨全生園の番組を視聴し、かつて療養所で行われていた強制隔離の実態に強い衝撃を受ける。また、ハンセン病資料館に足を運んだ作者は、語り部の平沢保治さんの講演会に参加し、想像を絶する体験を経てなお、「怨念を怨念で返してはいけない」という言葉に感銘を受ける。平沢さんの気持ちを大切に、相手の立場を思いやる「想像力」を働かせる努力をしていきたい。

### 5 法務大臣政務官賞 「小さな人権」

福島県・須賀川市立第二中学校 1年 <sup>すだ</sup>須田 <sup>ひなこ</sup>日菜子

作者は5歳の頃、父に頼まれた買い物のためにスーパーのレジに並ぶが、自分の順番を飛ばされそうになる。不安になっていたところを、それに気付いた年配のマネージャーの方が正しい順番どおりに取り扱ってくれた上、誤った対応をした店員ともども、作者に丁寧な謝罪の言葉をかけてくれた。小さな子どもの権利を大切にしてくれた出来事を今でも思い出す。子どもの尊厳や権利を大切にする大人に、作者もなりたいたいと思う。

## 6 全国人権擁護委員連合会会長賞 パン一つ買えない日本

香川県・高松市立太田中学校 2年 藤村 勇斗 ふじむら ゆうと

病気の母を見舞いに行った作者は、買い物をしようと病院内のパン屋に入る。顔半分が赤く腫れ上がった母親の容ぼうを見た他の客からの突き刺すような視線や言葉にいたたまれず、一旦はその場を立ち去った作者たち。しかし、「ごめんよ」と謝る母の涙を見た作者は、「何も悪いことをしていない、堂々とすればいいんだ」との思いに至り、母の手を取り再び店に戻り買い物をする。異質のものを受け入れる広い心があれば、多くの笑顔と笑い声がこの社会に聞こえてくるはずだ。

## 7 一般社団法人日本新聞協会会長賞 なぜ、祖父母と向き合えないのか

埼玉県・狭山市立中央中学校 3年 齊藤 美沙子 さいとう みさこ

作者には、認知症の祖父と杖なしでは歩行のできない祖母がいる。幼い頃にたくさんの愛情を注いでもらったのに、不安や悲しみ、照れくささから、祖父母に手を差し伸べることを躊躇する作者。ある日、新聞の投稿欄に「祖父母を病気でなくし、恩返しをしたくてもできない」という中学生の投稿を目にする。特別なことでなくていいので、自分から声をかけ、手を差し伸べようと決意し、祖父母との交流を持つようになる。

## 8 日本放送協会会長賞 感謝

高知県・須崎市立須崎中学校 3年 村上 一矢 むらかみ かずや

足に障害のある作者は、これまでの多くの先生や友達に支えられ、みんなと同じように学校生活を送ることができた。来年3月の卒業を控え、これからは一人でできることを増やしていきたい。また、小学校5年生から始めた車椅子バスケットにこれからも打ち込み、2020年の東京パラリンピックに出場する夢を実現させ、今まで支えてくれた周りの人たちへの感謝の気持ちを伝えられるよう、頑張りたい。

## 9 法務事務次官賞 私を生きる

東京都・新宿区立四谷中学校 3年 上田 倫子 うえだ りんこ

生まれてきたときには女性という性を受けた作者。しかし、心の中には男性のようにも女性のようにもありたいという二つの思いが存在するようになった。こうした思いには少なからず不安もあったが、周囲の人たちや本、インターネットから得た知見により、「身体は女性でも心は両性」という性のあり方を「一つの個性」と思うようになった。自分の思う「普通」が世間の「常識」との考えを捨て、新たな視点を持つことのできる柔軟な姿勢が求められるのではないだろうか。

## 10 法務事務次官賞 僕の色から見えたこと

長野県・学校法人松商学園松本秀峰中等教育学校 2年 木山沢 奏斗 きやまざわ そうと

小学校の図工の時間のある出来事で色覚異常が分かった作者は、みんなと違うことへの不安を覚えるが、「みんなと違っていいじゃないか。みんなの見えない色が見えるようになるかもしれないぞ」との父の言葉に心を救われる。父の言葉は、違いのある一人一人の人間を認められるようになれ、というメッセージだったのかもしれない。胸を張り、ありのままの自分で生きていきたい。相手のありのままを受け入れていきたい。

## 11 法務事務次官賞 大分、今日も元気です

大分県・大分大学教育学部附属中学校 3年 佐藤 千慧 さとう ちさと

4月14日に熊本・大分を襲った地震。その翌日、作者は買い出しに向かった店舗で、我先に水を確保する人々の中、水を確保できず途方に暮れるおばあさんを見かける。自分の水を分けることを作者は逡巡するが、何のためらいもなく自分の水をおばあさんに譲る一人の青年に出会う。自分が危うい状況でも自由に歩いたり逃げることのできない人たちに寄り添いながら、少しでも前向きに行動していくことを学んだ。